

特別講演

トータルな透析療法導入 ～透析治療の導入及び継続への試み～

埼玉医科大学腎臓内科 鈴木洋通先生

現在透析療法を受ける患者さんは、30万人にも及ぶ勢いであり、また年々2万人近い人達が新たに透析に入っている。この中で10年、20年という単位でみていくと、導入患者さんの年齢あるいは、原疾患というものも大きく変わっているということがわかる。そこで、それらにどう対処していくかが大切であるが、ほとんどそれらに対して対処されていないと演者は考えている。すなわち、依然としてほとんど多くが血液透析ということで選ばれている、しかもその血液透析は、センター透析と言われている非常に安易な方向で行われていることに、多くの人々は少なからず疑問を抱いているのではないかと考えている。

私自身、今回ここ10年間の透析治療というものと、透析前、あるいはそれ以前のCKDという治療を総括的に考え、どの様な透析治療への導入、あるいは透析療法の維持が良いかについて今までの経験をお話したい。

まず私は最初、CAPD First という考えで取り組んだが必ずしもCAPD First にいく人がすべてではなく、向く人、向かない人ということを明らかにしてきた。その点について、自分たちの経験からまずどういう人がCAPDに向いており、またどういう人が向いていないかということについて考えてみたい。さらにどの様な透析導入前のケアが必要かということについても検討した。その中で、明らかになってきたことは、本邦では高齢者、糖尿病を有する人が年々増加しているということは周知のごとくであるが、外国の論文等で心血管のところのみに捉われているが、決して本邦ではそれだけに捉われるべきではなく、悪性腫瘍というところにも目を向けるべきで、私たちはどの様な方法でそれらを未然に防ぎ、あるいは発見するかということについての方法論についてお話したい。

また導入後CAPD First で導入した人たちは少なくとも5年ないし、10年の間に血液透析を併用、もしくは血液透析への変更を積極的に行ってきた。さらに血液透析も家庭で行える家庭透析というものへと次の視点を動かしてきた。それらから考えてみて、さらに若い人では移植、あるいは血液透析も家庭透析という様に様々な組み合わせを用いるということが、透析治療に必要なではないかということについて今回皆様と一緒に考えていきたい。

鈴木洋通（すずき・ひろみち）

《所属》

埼玉医科大学腎臓内科教授

〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38

TEL/FAX 049-276-1620

《略歴》

昭和50年 北海道大学医学部卒業

昭和50年 慶應義塾大学医学部内科学研修医

以後、猿田享男教授に師事する

昭和56年 米国クリーブランドクリニックに留学

昭和61年 慶應義塾大学医学部腎・内分泌代謝学専任講師

平成3年 同 助教授

平成7年 埼玉医科大学腎臓内科教授

平成20年 同 地域医学・医療センターセンター長

《専門分野》

腎臓を中心とした高血圧、レニン・アンジオテンシン系

《所属学会》

日本内科学会

日本高血圧学会

日本腎臓学会

日本内分泌学会

日本透析医学会各評議員

日本循環器学会

日本臨床代謝学会